

# 湯治文化を生かした 温泉地づくり

大阪観光大学観光学部専任講師

内田 彩



## 滞在型観光地としての 温泉地

前近代の温泉地の基本は「療養」であり、この療養期間は「二廻り」(七日)を一つのクールとし、通常二廻りから三廻り(十四〜二十一日)の湯治が一つの形式として定着していた。

江戸時代後期には温泉医療(療養)が社会に浸透しており、湯治を理由とした長期の休暇取得や移動が認められていた。こうした社会背景のなか温泉地では長期間過ごすための仕組みがつけられていった。例えば当時の温泉地は泊食分離の部屋代のみであり、必要に応じてオプションを追加することが可能であった。費用負担が少ないのは、生活必需品を持ち込み自炊して滞在する方法であった。

他方で宿や貸し道具屋等から道具を借り、お手伝いを一週間単位で雇うことも可能であった。温泉地には誰もが利用する宿、共同湯といったハードと、食品、日用品、生活支援などの個人のニーズや経済状況に合わせて選ぶことができるソフトが

地表に湧きだす恵みの湯は、時に喜びを、時に再生する力を人々に与えてきた。奈良時代の玉造温泉には「温泉を求めて老若男女が訪れ、市をなし、入り乱れて宴を行う。そして一度入浴すれば美しくなり、再び入浴すれば万病が癒える」(『出雲国風土記』)という記述が残されている。こうした魅力ある温泉資源に人が集い、まちが形成され、温泉を中心とした文化が生まれていくのは当然の成り行きであった。

## 温泉地が育んだ文化とは

日本人の温泉好きは現代も変わ

らず、近年では日帰り温泉施設の増加や都市型温泉の開発が続いている。しかし、従来の温泉地は衰退が指摘され、厳しい状況にある。この背景には掘削技術の向上により温泉地以外でも温泉開発が可能になったことがある。それに加え温泉地自体が時代に対応した固有の魅力が形成し得ていないのではないだろうか。それでは温泉地固有の「魅力」とは何か、まずは「湯治文化」の歴史をひもといてみよう。

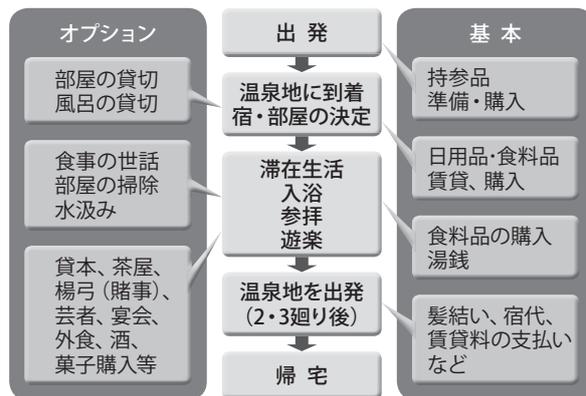
### 花開く湯治の旅

日本の旅は江戸時代に花開くが温泉地も例外ではなかった。幕府は

物見遊山を目的とした旅を禁じていたが、信仰(参詣)、療養(湯治)を目的とする旅に関しては認めていた。これらを建前とした旅は、「楽しみのための旅」を庶民にまで広げ、日本の旅の大衆化に大きな役割を果たすことになる。寺社参詣は寺社を目的地として行き帰りにさまざまなお名所を見て回る旅でもあった。いわば日本における周遊型観光の原型と言えよう。

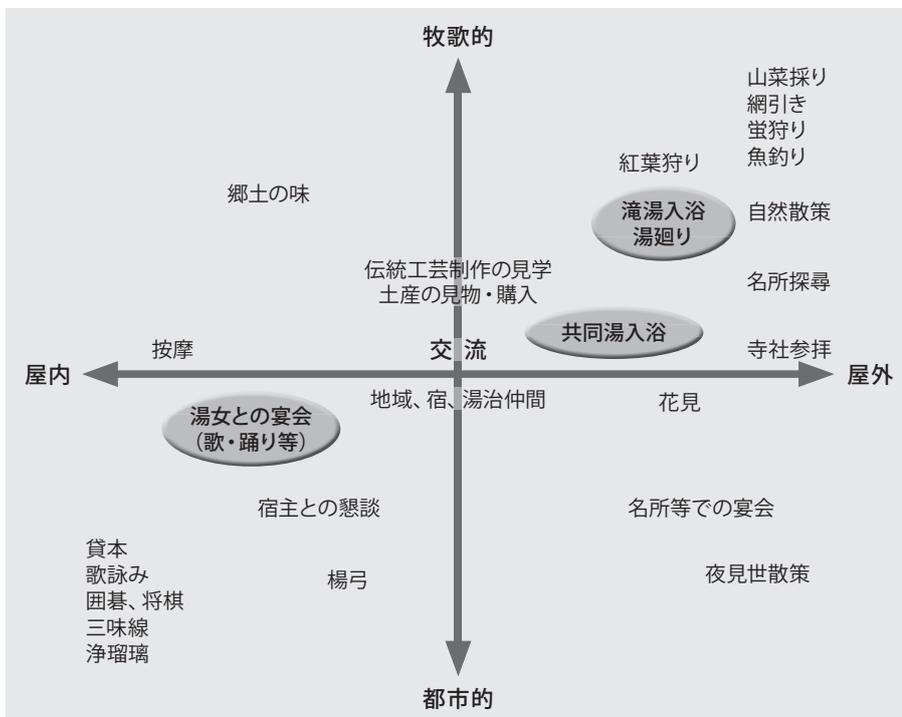
一方で温泉地を訪れる旅行者は、基本的には温泉地における滞在が目的であった。つまり、ここに日本における「周遊型」「滞在型」の旅の文化が育まれていくことになる。

図1 温泉地における滞在生活の仕組み



注：資料より筆者作成

図2 温泉地における保養・観光行動



注：●内は温泉地特有の遊び  
 出典：武井 (1989) を参考に筆者加筆  
 (本図内の文言は原典を尊重して、当時の表現で掲載します。編集室)

あつたと言える(図1)。  
 温泉地での長期滞在は、湯治を許容する社会的な制度と、各自の経済状況に見合った滞在システム、滞在・療養行為をサポートする体制が存在することで成立していた。江戸後期の「湯治」は、日本における滞在型観光(リゾート)の原型であったと言える。

**温泉地の保養・観光行動**  
 温泉地で三週間もの長い間、湯治者は何をしていたのだろうか。その

答えを探して当時の記録を読むと、温泉に入浴して心身を癒やし、何もしずくに心からの休息を得る人々も少なくなかった。

一方で温泉寺社への参詣や観光行動を行う人々もいた。温泉地での遊

びの種類は三味線、囲碁、酒宴など華やかな都会的な要素の濃い遊び、花見、雪見、釣り、名所散策などの牧歌的な四季の遊び、湯廻り、土産の購入などの温泉地ならではの遊びが存在し、それらを温泉地というヒ

ューマンスケールの空間のなかでコンパクト(時間的・距離的)に楽しむことができた。

高齢者や体調の悪い人も訪れていた温泉地では、温泉を中心として本人の体力や病状、文化的な能力、経済力に応じて湯治生活を楽しまささまざまな保養・観光のプログラムが存在していた(図2)。こうした滞在プログラムの中心に位置するものが、老若男女問わずに参加でき、体力的・経済的負担が少ない「交流」であった。

### 湯治場の「交流文化」

滞在者たちは、宿や自然散策先で「ゆあみの友」たちと宴会を開いたり、一緒に名所見学したりしながら過ごしていた。こうした温泉地の交流は独自のものと捉えられており、橋南(はしなん)は、『西遊記』(二七九五)で不知火(しらぬい)見学の人々が、顔も見えないなか酒を取り出し、小唄、三味線などの芸を尽くして遊び戯れるのを見て「隔てなくむつびかたらふ事、有馬、但馬など、温泉の場の交のごとし」と述べている。

また、幕末に日本に来た外国人は「お客の数やその様子から判断して、温泉を口実に、人々はそこで人に会うために来ているのである。〈中略〉昨日までは、お互いに知らなかった人々が、色々の所から集まってきた、気楽な世間話に花を咲かせる。〈中略〉毎年毎年同じ客が、季節がよくなると、箱根の湯を訪れる。こうして箱根は事実上、日本のチェルテンハム、日本のバーデンバーデンとなっている」(『F・ベアト写真集1』)と述べている。

こうした交流はなぜ生まれたのか。これには長期滞在という時間的な余裕と日常生活から離れた解放感があつたのではないだろうか。街を歩く人々も、入浴に適した服装や髪形をしており、地元の人と湯治者は一目で分かったという。こうした視覚的な非日常感も温泉地の別世界的性を高めていたと言えよう。

また湯治者が「ここに来る人はみな病んでいるのだから、打ち解け合いながら過ごしましょう」(『有馬日記』一七八二)と述べるなど、「病氣療養」という湯治者の仲間意識があつた。

た。この仲間意識は、継続した交流を育み、再訪する動機を生み出していった。まさに温泉地は療養・保養機能を生かした社交の場でもあつた。

#### 交流の仕掛け―場所と人―

それでは人々はどうのように交流を持っていたのであろうか。

温泉地は基本的に「宿泊」は宿「入浴」は共同湯、「販売・飲食」は市・商店や茶屋などで役割を分業していた。そのため、人々は生活のために温泉街を回遊しながら交流を持つ機会があつた。また、宿はオープンスペースであり、地域の商人、他宿の人が自由に訪れ、宿泊者と交流を持つことができた。

しかし、人が集まれば交流が生まれるわけではない。温泉地の交流に関して宿の主人などにより演出された交流、湯治者からのアプローチ、湯治者同士の自然な歩み寄りによる交流、滞在生活を通じた地域の人々との交流があつた。

特に宿の主人の役割は大きく、顧客管理から湯治者の日常生活・観光行動の手配まで、滞在生活が快適で

豊かになるように宿の主人が配慮していた。それに加え、古参の湯治者も、宿、名所見学、共同湯などで湯治者同士をつなげる役割を果たした。多様な人々が集う温泉地には、文化人等も多く訪れており、地域によっては文化人が集うサロンなどが存在していた。こうしたサロン以外にも温泉地内で書画展が開催されるなど文化的な楽しみも存在していた。宿の主人はこの「文化的な集積」を宿泊客に提供しており、「文化」は時に人同士だけではなく、人と宿をつなぐ要素の一つにもなっていた。

### 現代の温泉地づくり に生かす「湯治文化」

江戸後期になると、大規模な温泉地は療養の伝統を継承しつつ、温泉街と自然が調和した景観と共同湯を中心としたにぎわいのある盛り

場があり、ヒューマンスケールの空間のなかで各温泉地の個性が生かされた滞在を楽しめる場所となった。

温泉地の大規模化・歓楽地化・画一化が加速度的に進んだ戦後のマスツーリズムにおいて、多くの温泉地がヒューマンスケールの魅力を失ってしまった。しかしながら、現在人気の温泉地の多くは、個性を生かしたまちづくりに努めており、温泉地の重要な魅力はそこにあると言えよう。

#### 「湯治文化」をどう伝えるのか

温泉地において「文化」をどう楽しんでもらうのか。

まずは「見る文化」として自然や各地域の個性を生かした温泉街、共同湯、浴衣、土産、美しい風景など、視覚で認識できるものがある。近年は温泉地の再生を目的に共同湯等の復元や新設などが相次いでいる。これらは温泉街の雰囲気高め、別世界に誘うだけではなく、滞在者をまちに誘い出す仕掛けにもなる(写真1)。

次に「体験する文化」として、各地域に伝わる入浴方法、泉質、温泉

熱、温泉水、地域の食材を生かした料理がある。また、住居が洋風化された現代において、「日本旅館」自体が体験型の施設となり得るだろう。そして、旅行だから「何かをしなくてはならない」という固定概念を払拭する、「何もせず温泉に入り、ただリラックスして過ごす」という体験の提示も大切だ。

さらに「湯治文化」を支える「温泉地が生み出した滞在の仕組み」が重要である。これらは滞在型観光地としてのシステム、温泉地における保養・観光行動などであり、個人客



写真1 山代温泉 明治時代の「総湯」を再現した「古総湯」(筆者撮影)

のニーズに応じて滞在方法を選択できること、昼間の時間の飲食施設や滞在・交流拠点などを含めて滞在生活を充実させるハードとソフトが求められる。また、長期的には温泉地での療養・保養を支える社会システムが必要であろう。

最後に、滞在を支えてきた「温泉地の交流」から「湯治文化」の可能性について考えてみよう。

## 温泉地の不易流行とは — 温泉地の「交流」を通して —

短期滞在が主流になった現代において、旅行者は本当に交流を求めているのか。こんな疑問を持ち温泉地で滞在型に取り組む宿泊施設を調査した際に印象的な出来事があった。施設側は、朝食時に一人旅の女性同士が隣り合わせになるように座席割りしていた。四、五名が静かに食事をしていたが、常連客の一人が声をかけると交流の輪が広がっていった。こうした出会いは、一緒に散策や施設企画のツアーへの参加を促すだけではなく、再訪の動機につなが

っていくという。交流の懸け橋となる人々、交流できる場により滞在生活が豊かになる。そこには、温泉地滞在における交流の本質が存在していた。

温泉旅行について大学生に尋ねたところ、その魅力として「家族との交流」を挙げた学生が複数いた。忙しい生活で家庭内でも交流を持つ機会は少なくなった現代では、家族で日常から離れ、宿に滞在し湯に浸りながらゆっくり話すこともまた「温泉地ならではの交流」なのかもしれない。

重要なことは形にとらわれることなく、その本質にあるのではないだろうか。近年、温泉地で見られるアートを利用した温泉地づくりも、温泉地が大事に保有してきた文化的な交流と根本は類似している。時代により表現は異なるが温泉地に行くと非日常的な「何かに出会える」そうした魅力が温泉地は生み出し育んできた。

温泉地は大きく変容しているが、温泉が人々に喜びや楽しみを与える資源であることに変わりはない。今

後の温泉地では、変わることはない温泉の本質と各地域の個性・歴史を学び、温泉街全体で価値を共有し、時代に応じた新たな魅力を生み出していくことが求められる。そして、各地域の「湯治文化」を次世代に伝えていくことが、温泉地固有の魅力につながるのではないだろうか。(うちだ あや)

### 【参考文献】

- ・内田彰：「滞在型観光—江戸時代後期の温泉地における行動傾向」日本観光研究学会監修・橋本俊哉編『観光学全集 第四巻 観光行動論』(1013、原書房) pp.123-127。
- ・日本温泉文化研究会『温泉をよむ』(1011、講談社)
- ・下村彰男：「わが国における温泉地の空間構成に関する研究(1)—近世後期から明治期にかけての温泉地の空間構成」『東大農学部演習林報告』(一九九三)90号、p.23-31。
- ・武井裕之・渡辺貴介・安島博幸・天野光一：「江戸・明治期の温泉地における長期滞在の構造に関する研究」『都市計画論文集』(一九八九)24号、pp.329-330。
- ・橋本俊哉：「江戸後期の「お伊勢参り」の旅にみる行動特性—「参宮日記」の分析をもとに—」『応用社会学研究』(一九九五)37号、pp.61-75。
- 内田彰(うちだ あや)  
大阪観光大学観光学部専任講師。二〇一二年立教大学大学院観光学研究科博士後期課程修了。博士(観光学)。日本温泉地域学会幹事、日本温泉文化研究会運営委員、公益財団法人日本交通公社「温泉まちづくり研究会」研究アドバイザーなど。日本観光研究学会「第五回学会賞論文奨励賞」等を受賞。